

暗殺、誘拐——映画の世界のような話が書かれている。ミグ21を手に入れるとか、砲身の長さ150メートルの大砲とか、とにかくスケールが違う。スタックスネットという高度なウイルスで、核兵器開発に必要な濃縮ウランが十分に生産させなくするという話も書かれている。

元モサド工作員のビクター・オストロフスキーの回想によると、モサドは偽造旅券や偽造紙幣の作成用に工場と化学研究所を有しており、各国の旅券や紙幣の紙質を分析しては複製を試み、またそこに押される**入国管理用のスタンプまでも偽造**しているという。イスラエルには世界中からユダヤ人が流入してくるため、各国の旅券サンプルが入手し易いのである。またオストロフスキーによると、モサドはカナダの旅券を大量に偽造し、使用しているということである。

1939年5月17日、イギリス政府は**ユダヤ国家を承認したバルフォア宣言**を撤回するかのようになり、「1939年の白書（マクドナルド自書）」を公表した。これは欧州から続々とパレスチナに移住してくるユダヤ人を相当数限定するものであり、いわばアラブ側への妥協の表れであった。イギリス政府としては予想されるドイツとの戦争のために、少しでも多くのアラブ諸国の協力を取り付け、重要な戦略拠点である中東地域を自らの勢力圏として守る必要があったのである。

1947年11月29日、**国連総会はパレスチナ分割決議第181号**を採択し、**ユダヤ国家の創設を認める**こととなった。ところがこの分割実はユダヤ側に大幅に譲歩したものであり、パレスチナ側には全く受け入れられるものではなかったのである。こうして今度は、パレスチナ人・ユダヤ人との間の抗争が激化し、ユダヤ人の過激組織もパレスチナ人をターゲットにするようになる。

そしてイギリスがパレスチナから撤退する**1948年5月14日**、**イスラエル国家は独立を宣言し**、同日、**アラブ諸国はイスラエルに対して一斉に宣戦布告**を行った。第一次中東戦争の開始である。

イスラエルは何とか第一次中東戦争を生き残った。1949年2月から7月にかけて各国との休戦協定が結ばれ暫定的な国境線が確定したことで、イスラエル国家及びインテリジェンスの至上命題はこの国境線を守りぬくことになったのである。

軍事情報部であるアマン、保安任務を行うシソ・ベト（1960年代以降はシャバク）、そして対外情報組織で

第一次中東戦争によってイスラエルは 1947 年の国連決議のパレスチナ分割決議案で定められた領土から大幅に拡大し、北はレバノンとの国境から、南はエジプトのシナイ半島に迫る領土を獲得したのである。しかし同時に、この戦争によって 80 万人ものパレスチナ難民が生じ、ガザ地区には難民が押し寄せることとなった。イスラエル国家の独立とそれに続く戦争によって、パレスチナ問題は複雑化し、イスラエルは常に四面楚歌の状況に置かれることになる。

さらにまずいことに、実行犯たちはこの種の工作の鉄則である**コンパートメント化の原則**（お互いに連絡を取らず、知っていることを限定することによって組織全体を守る）に従わず、お互いが連絡を取ってしまったため、131 部隊のメンバーは芋づる式に逮捕されることになる。その中には、マックス・ビネット少佐のような、スザンナ作戦には全く関与していないベテランの大物スパイも含まれていたのである。ビネットはエジプト当局の拷問、取り調べの後、1954 年 12 月に獄中自殺した。ビネットの他にも二人のメンバーが絞首刑、4 名が長期の禁固刑を宣告されている。彼らが釈放されるのは、1967 年の第三次中東戦争後の捕虜交換まで待たなければならなかった。

作戦を指揮したエルアド自身は、我先にエジプト国外に脱出して難を逃れた。エジプト当局は欠席裁判を行い、彼に死刑の判決を下している。そしてこのようなアマンの失態に対して、イスラエル政府は沈黙を守り続けた。

1956 年 10 月 29 日、IDF（イスラエル国防軍）は突如エジプトに侵攻することによって、**第二次中東戦争（スエズ動乱）**を引き起こした。この戦争のためにイスラエル政府は事前に英仏政府、特にフランス政府と話し合い、戦争の筋書きを綿密に練っていたのである。

また 1950 年倒後にイランやトルコがイスラエル国家を承認することで、イスラエルの潜在敵国であった周辺国家（シリア、エジプト、イラク）のその外側の国々との関係を構築する、いわゆる「**外周戦略**」の原型ができつつあった。外周戦略の基本的な考えは、四方を敵国に囲まれているイスラエルにとって、そのさらに外に位置するイラン、トルコ、スーダン、エチオピアとの協力を目指すというものであり、これは中国で言うところの「**近攻遠交**」に近い考え方である。

5月15日、アイヒマン移送のためにハルエルがブエノスアイレス入りした。ハルエルのアイヒマンに対する第一印象は、「どこにでもいるような男だった。彼が何百万人もの同胞を処刑したとは信じがたい」というものであった。アイヒマンはモサドの隠れ家で、読書や音楽を聴いて過ごしていたという。

5月19日、アルゼンチン独立記念日式典に出席するため、イスラエル政府の代表団がエル・アル航空によってブエノスアイレス入りした。ハルエル達はエル・アル航空の制服に身を包み、偽造パスポートを携えてこのエル・アル航空機に乗り込んだのである。アイヒマンは強力な鎮静剤を打たれて意識が朦朧とした状態であった。アイヒマンを移送するこの航空機はセネガルのダカールに給油のために立ち寄り、5月22日の早朝、テルアビブに到着したのである。

~~~~~

エル・アル航空 イスラエルの国営航空会社。

~~~~~

ハルエルは長官の身分にありながら、工作人員達と現場に出向き、夜通しで張り込みを行うこともあり、モサドのオフィサー達はこのようなハルエルを理想の長官と考えていた。しかし軍人上がりのアミットにしてみれば、**指揮官が現場で直接作戦行動に参加することは理解できないこと**であり、アミットはモサドを近代的な官僚組織へと変貌させることを決意したのである。

アミットの時代に生じた1967年6月の第三次中東戦争（六日間戦争）は、アミットが改革したモサドの情報収集能力を本格的に試す契機となった。戦争自体はたった6日間の戦闘で**イスラエルの勝利**に終わったが、この勝利の陰にはモサドによる戦術的な情報収集や、アメリカへの根回しなどが密かに行われていたのである。

この戦争の原因はもちろんパレスチナ問題であるが、直接の契機はこの地域の水利問題——イスラエル、シリア、ヨルダン国境の間を縫うように流れる**ヨルダン河の治水権**にあった。1964年にイスラエルは大規模な農業地開発のためにヨルダン河の水源であるガリラヤ湖にダムを設置、しかし同時期にヨルダンも河岸工事によって分水路を設け、水の流れをヨルダン側に向ける工事を施した。このヨルダン側の治水行為によって、イスラエル側への水資源の供給が3~4割も減少したと言われている。イスラエルにとってこの水資源問題は死活的と映ったようであり、1965年になるとIDFの部隊を動員して強引にこの分水路を数次に渡って攻撃したのである。

このイスラエルの軍事行動はヨルダン側の反発を引き起こし、イスラエル・ヨルダン国境で武力衝突が頻発するようになる。そしてこの衝突に**パレスチナ解放機構（PLO）**が絡んでくることによって、ますます暴力の連鎖が鮮明となる。

同年 8 月 16 日、ラシッド基地を離陸したレドファのミグは、真っ直ぐバグダッドに向い、その後方向転換してイスラエル側に、イラクのレーダー網をジグザグ飛行で掻い潜りながら国外逃亡を敢行したのである。この時、ヨルダンの航空管制レーダーがこの機体を未確認機としてシリア空軍に連絡したか、シリア側からは、シリアの航空機が訓練中との返答であった。こうしてレドファは、イスラエル空軍のミラージュ機にエスコートされながら無事イスラエル入りしたのである。

ここでミグの実物を入手し徹底的に分析したことが、第二次中東戦争の緒戦に活かされることになる。**当時西側でミグ 21 を入手したのはイスラエルが初めて**であり、これによってアミットのモサドは国内外から絶賛されることになる。そしてこの機体は CIA を通じてアメリカ空軍にも貸与され、そこでもソ連製ミグ戦闘機は徹底的に分析されたのである。

1 月 22 日、モサドの工作チームが道路脇に停車させたフォルクスワーゲンに爆薬を仕掛けた。午後 3 時 45 分、チェンバースは彼の車が通過するのを確認し、遠隔操作の爆薬によってサラメを車ごと吹き飛ばしたのである。彼のボディガード、側近 8 名も即死であった。こうしてハラリと「バヨネット」による「神の怒り作戦」は幕を閉じた。

・・・

この事件は 2005 年に、スティーブ・スピルバーグ監督によって『ミュンヘン』として映画化されている。

1973 年 10 月 6 日午後 2 時、シリア・エジプト軍は同時にゴラン高原、及びシナイ半島からイスラエル国境に対して侵攻した。イスラエルから見て北方から攻め入るシリア軍部隊は 5 個師団と 1400 両の戦車、南方から攻め入るエジプト軍部隊は 1700 両の戦車を先頭にした 9 個師団から編成されており、それに対するイスラエル防衛部隊はわずか 1 個師団と 300 両の戦車しか有していなかった。そのためイスラエルは全く不意をつかれた形となり、数時間後には多くの軍事拠点が撃破され、場所によっては全滅の部隊まで出すこととなった。こうしてイスラエルは建国史上初めて国家存亡の危機に立たされることになる。この国家的危機は「情報の失敗」の性格が色濃く、それは主に軍事情報部であるアマンの情報見積の甘さから生じていたのである。

マインドセットとは、分析官の持つ知識や考え方がそのまま情勢判断に適用されてしまうことであり、客観的な情報が入ってきてもそれが固定観念と反する情報であれば、きちんと検討されなくなるという現象である。

1981年6月7日、8機のF-166戦闘機と6機のF-15戦闘機がヨルダンとサウジアラビアの領空を侵犯して、イラク領内に侵入した。イラクの防空網については、イラン空軍からの情報やモサドの事前の調査で、死角があることが明らかになっており、さらに攻撃隊は地表すれすれの超低空飛行によって文字通りレーダー網を掻い潜って目標に接近した。これらの戦闘機は原子炉から20キロメートル付近で高度2100メートルまで一気に急上昇し爆撃を敢行したのである。また原子炉付近には、モサドに雇われたフランス人技術者が事前に誘導ビーコンを設置していたため、イスラエル空軍機はイラク側の反撃を受けることなく、正確に**イラクのオシラク原子炉を破壊することに成功した**。この爆撃によって10名のイラク兵と1名のフランス人技師が亡くなっている。

非合法にエチオピアのユダヤ人を救出

この問題に直面し、モサドはまたもやCIAを通じてホワイトハウスに働きかけ、レーガン政権はモサドとCIAの共同作戦を了承した。当時イスラエルとスーダンの関係は悪化していたが、アメリカはスーダン政府との良好な関係を保っていたためである。イスラエル政府はワシントンのイスラエル・ロビーを動かし、アメリカからスーダンへの経済援助を米議会に認めさせ、これによってスーダン政府はCIAとモサドの活動を黙認することになったのである。

早速、モサドとCIAの立ち上げたダミー会社が、**スーダンが紅海に領有する小島を購入した**。スーダンに逃げのびたファラシャ達は、モサドの工作員に導かれてこの小島までたどり着き、そこから船でシナイ半島、そして輸送機によって次々とイスラエルに移送されたのであった。

2006年7月にもIDFは再びレバノン**侵攻**を実行し、ヒズボラとの泥沼の戦闘が行われた。

スパイ獲得の基本は「MICE」である。「M」は金、「I」は思想信条、「C」は強制、「E」はエゴ、自己満足である。スパイを雇う側はこれらの要素を上手く組み合わせ、て巧妙に雇い入れなければならない。

イスラエルにとってイランへの武器輸出は、経済的にも重要な問題であった。イスラエルでは 10 人に一人が兵器産業に関わっており、それはイスラエルの輸出総額の四分の一を占めているとも言われている。1970 年代から 80 年代にかけて、モサド、もしくはモサドの OB 達は、**新たな兵器輸出先を開拓する任務**を重視していたのである。

キムへの任務は、レーガン政権の了承の下で米国からイスラエルに供与される TOW 対戦車ミサイルをイランに横流しすることであった。そしてその代償にイランはヒズボラに圧力をかけ、レバノンで誘拐されたアメリカ人を解放するという筋書きである。

この情報を受け、モサド内においては事件の後始末について議論され始めた。ヴァヌヌに対しては暗殺による解決も考えられていたが、ユダヤ法（ハラハー）ではユダヤ人がユダヤ人を殺すことを固く禁じている。後にモサド長官となるシャブタイ・シャヴィトもこの例に倣い、ヴァヌヌ暗殺を断念したと言われている。そこでモサドは、ヴァヌヌを拉致する方向で話を進めた。モサドはイギリス秘密情報部のお膝元であるロンドンで事を起こすことを避け、当時支部のあったローマにてヴァヌヌを拉致する計画が練られたのである。

問題はどうかやって彼をローマにおびき出すかであった。ヴァヌヌの性格などが慎重に検討された結果、**異性を利用しての工作**が考え出されたのである。この工作には、当時 26 歳のモサド職員、シェリル・ベントフが起用された。ベントフは既に同じモサド職員のオフエルと結婚していたが、ベントフ自らこの役を買って出たとも言われている。

9 月 24 日、ロンドン中心部のレスター・スクエアにて、ヴァヌヌは「アメリカ人女性」シンディーとの衝撃的な出合いを果たすことになる。ヴァヌヌはシンディーに首っ丈となり、幾度かのデートを重ねた後に、二人でローマへ旅行に出かけることとなった。そして 9 月 30 日、二人は英国航空 504 便でロンドンを離れ、その直後にヴァヌヌはローマにおいて行方不明となった。ヴァヌヌの失踪から数日後、「サンデー・タイムズ」紙はようやくイスラエルの核兵器についての記事を掲載したのである。

失踪から 40 日が経った 11 月 9 日、イスラエル内閣官房長官、エリヤキム・ルービンスタインは、突如ヴァヌヌを逮捕した旨を公表した。イスラエル当局は逮捕についての具体的な説明を避けたが、ヴァヌヌ自身がエルサレムの裁判所に護送される際、自らの掌に書いた文字を護送車の窓に押し付け、マスコミにこう訴えたのである。「ローマで私はハイジャックされた。86 年 9 月 30 日。21 時。BA504 便」。こうしてヴ

アヌが拉致された経緯が明らかになった
のである。

当時イラク政府はカナダ人技術者、ジェラルド・ブルを雇い、「バビロン計画」と呼ばれる新たな兵器の開発に着手していた。これは砲身の長さ 150 メートル、口径 1 メートルの超巨大砲（スーパーガン）を建造し、イラクから直接イスラエルを砲撃するという計画であった。計画によるとその射程距離は 1500 キロもあったと言われている。

1990 年 3 月 22 日、ブルはブリュッセルの自宅で何者かに銃殺された。この実行犯は特定されていないが、やはりモサドの関与が濃厚であると考えられる。さらにモサドは超長距離砲の情報をイギリス当局に流し、数週間後にはイギリスで製造され、港からイラクに向けて運び出されようとしていた巨砲の砲身が差し押さえられた。積荷には石油パイプライン用と記されていた。

マブフーフがホテルにチェックインしたのが、1 月 19 日の午後 3 時 35 分。その頃には暗殺実行チームが、マブフーフの部屋である 230 号室のすぐ近くの部屋に陣取っていたのである。マブフーフは一旦、仕事のため外出しているが、その際にモサドのチームが 230 号室のドアキーを開錠し、4 名の暗殺者が部屋の中でターゲットを待ち構え、午後 8 時半頃に作戦は実行された。そしてその 2 時間後には暗殺チームの全員が何事もなくドバイ国外へと脱出したのである。暗殺者たちはカード類も一切使わず、足跡も残らないはずであった。ここまではダガン長官が褒め称えたように、完璧であった。

当初この事件は部屋の内側から鍵がかけられていたため、身元不明の男性の病死として片付けられていたが、マブフーフとの連絡が取れなくなったハマスのメンバーからドバイ警察に対して、亡くなった男性がハマスの幹部であることが伝えられている。この情報提供を受け、ドバイ警察は事件現場のホテルを始めとするドバイ中の監視カメラの映像を集め始め、捜査を開始したのである。その結果、2 月 28 日にはドバイ警察長官、ダヒ・カリファーンがマブフーフ殺害事件にはモサドの関与があったとして、実行犯とみられる 11 名の監視カメラの画像とイギリス、アイルランド、オーストラリア、フランス、ドイツのパスポートが使用されたことを公表した。ドバイの空港やホテルの監視カメラが捉えた映像はぼかし等の加工もされず、そのまま世界中に公開されており、普通のカジュアルな服装の若者たちがモサドの暗殺者であったことが、世界中に知れ渡ることとなった。

一方のモサドにとっては、ドバイ警察がここまで徹底するということは想定外であったようで、さらに部内関係者の顔写真が世界中に晒されてしまったというのは前代未聞の出来事であった。ドバイ警察は暗殺事件の責任者として、モサド長官であるダガンを名指しで非難するに至ったが、モサド、並びにイスラエル政府の関係者たちはこれを認めなかったのである。

2010年9月28日、イラン鉱業省の情報技術部門幹部は、イランが海外から大規模なサイバー攻撃を受け、産業用パソコン約3万台にコンピューターウイルスの感染が見つかったと公表した。その後、11月29日にイラン大統領、マフムード・アフマディネジャードは、同国のウラン濃縮工場の遠心分離機がウイルスに感染していたことを認めたのである。このウイルスは「スタックスネット (Stuxnet)」として知られるワームの一種である。スタックスネットは、同年6月17日にベラルーシに拠点を置くセキュリティ・ソフト会社が発見していたが、当時、このニュースは注目を集めなかった。しかしこのイランへの攻撃によって、たちまちスタックスネットはサイバー業界における関心の的となったのである。

スタックスネットは**極めて高度なワーム**として知られている。一旦端末への侵入に成功すると、自身を自動的に更新して存在を悟られないように潜伏する。そしてドイツのシーメンス社製の工場向けプラント制御用ソフトウェアを発見すると攻撃を開始し、制御システムのファイルを書き換えてしまうのである。その結果、同制御システムによってコントロールされる機器は設計通り作動しなくなる。このシーメンス社の制御システムは、イランのナタンズにあるウラン濃縮施設の遠心分離機にも使用されており、スタックスネットはこの遠心分離機のモーターを制御するシステムに干渉し、モーターの回転速度を変化させるような書き換えを行ったものと推察されている。そうなるとウランの濃縮が想定されていた通りに行われず、核兵器開発に必要な濃縮ウランが十分に生産されなくなるのである。

さらにこのワームはネット経由だけでなく、USBメモリ等を介在して感染を広げることができる。つまり新品のUSBメモリであっても、一度感染した端末につないだ途端、それが感染の媒体となってしまうというものであり、それはネットにつながっていないスタンドアローンの端末であっても感染する危険性があるということを意味していた。

問題はこれ程のワームをどこが作り出したのかということである。様々なニュースやレポートが、アメリカのサイバー戦を担うNSAとイスラエルによる共同作業であることを示唆しているが、今のところ明確な証拠はない。さらにイスラエル側ではモサドやIDFのサイバー・通信情報部隊である8200部隊の関与が噂されている。2012年6月には『ニューヨーク・タイムズ』紙が、「NSAと8200部隊がスタックスネットをイラン攻撃用に作った」と報じた。

ただしスタックスネットの開発のためには、まずナタンズのウラン濃縮施設の制御システムにシーメンス社製のものが使われていることを調査し、遠心分離機の現物を入手する必要もあったであろう。さらに実際にシステムに感染させるためには、部内者の協力が不可欠であるため、そこにモサドの関与があっても何の不思議もない。二〇一六年よりモサド長官となるヨシ・コーヘンは、モサドの特殊工作部門に属していた頃に8200部隊と協力し、人的情報（ヒュミント）と通信傍受情報（シギント）との融合を図った「ヒュギント (HUGINT)」という概念を打ち立てた。つまりスタックスネットの成功は、モサドの人的な内通者の獲得と8200部隊のサイバー技術を結びつけたことが大きく、この功績によりコーヘンはイスラエル安全保障賞を授与されている。

本書を執筆したのは、モサドのような特殊な組織が、政府の中でどのようにコントロールされているのか、という政治学的な関心からである。一般的に情報機関に許される権限

と、政府によるそのコントロールは難しい問題である。旧ソ連やアメリカのように情報機関の中央集権化を進めると組織の権力は肥大化し、政治的影響力を持つようになる。その反対に戦後の日本では情報機関に大きな権限を与えてこなかった。

モサドの場合は、組織を規定する法律を持たないまま強力な権限を与えられたため、いつ暴走や腐敗を犯してもおかしくないのだが、幸いにも過去 60 年間、幾つかのスキャンダルは散見されるものの、モサドの存在基盤を揺るがすような大失敗は犯していないといえる。